

平成23年度文化財公開展

美山の神仏 (かみほとけ) ふたつの樺八幡神社より

山が色づく秋、美山の霊像が県歴博へ降り立つ！

山間に集落が連なる美山町は、福井市街と大野市、さらに美濃を結ぶ路線にあることから交通上の重要な地域でした。美山のことについて記載された古い文献はほとんど伝えられていませんが、平安時代に作られた国の法令集「延喜式」には国家を守る重要な神社として「樺神社」の名が記されています。この樺神社こそ今日美山町に残る樺八幡神社のことと考えられ、少なくとも1300年前には都にも知られた越前有数のパワースポットであったことがわかります。ところで「樺八幡神社」を名乗る神社が美山町に3か所あることをご存知でしょうか？足羽川沿いに東河原、中手、南野津又の各集落に鎮座しておられます。今回の展示では3か所の樺八幡神社のうち東河原地区ひがしこうばらと中手地区なかんてのふたつの同神社からお出ましをねがいました。神像や狛犬など神社にまつわる文化財とともに、幾多の苦難を乗り越え伝えられた仏像から古社の持つ長い歴史と、神社でありながら仏を祀る神仏習合の世界を体感していただきます。

一、文献に見る樺八幡神社

美山や樺八幡神社の歴史を記す文献は非常に少なく、草創期に関わる事情やその後の歩み等、文字資料からわかる情報はごくわずかです。「延喜式」は平安時代初期の法令集として知られていますが、この中に「樺神社」の名が記されています。美山に関わる固有名詞を記載した文献のうち、現存最古と考えられます。また、江戸時代末期の編集ながら大野郡の名所旧跡の様子や昔話を紀行文調に伝えているのが「深山木」です。この深山木から多く引用し、「樺」の名の由来や3つに分かれた理由等、樺八幡神社の歴史を伝える「越前国名蹟考」を江戸時代末期の写本でご覧いただけます。



中手樺八幡神社社頭

二、東河原樺八幡神社のかみ・ほとけ

東河原集落を見下ろすかのように鎮座する東河原の樺八幡神社にもさまざまな仏像が伝えられています。なんとといっても目を引くのが等身大の閻魔王立像です。大きく見開いた目と太い眉毛を吊上げ、恐ろしい表情で礼拝者を圧倒します。中央に「王」と刻まれた冠を見ると、金具が非常に丁寧かつ緻密に彫刻されており、注目に値する鎌倉時代の仏像です。また、閻魔王と同じ中国の道服を着ていることから十王像とされる小像が8軀伝えられています。どれも同じように見えますがよく顔を拝すると、目を見開いて怒った顔、すました顔、瞑想した顔等いずれも表情豊かです。平安末期から鎌倉時代の作と考えられます。祈祷札(文政12年/1829銘)も神仏習合のありさまを示す貴重な資料です。その他、越前の神社でよく見かける越前青石(笏谷石)製狛犬の愛嬌たっぷりの姿もご覧いただきます。



木造 閻魔王立像(東河原樺八幡神社蔵)

三、中手樺八幡神社のかみ・ほとけ

中手の樺八幡神社は、多くの県指定文化財を所蔵することで知られています。太い柱が魅力的な「古拝殿」には周丈六(通常の丈六の4分の3)の大きな阿弥陀如来坐像をはじめ大日如来や神将像等5軀の仏像が所狭しと安置されています。いずれも平安後期らしい優雅さと気品を醸し出す美しい尊像です。今回の展示では普段見ることのできない側面や背面も拝していただけます。この他神殿を守る永正8年(1521)銘の越前青石(笏谷石)製の狛犬や愛らしい神鳩像もご覧いただきます。

美山屈指の古社・樺八幡神社の由緒を伝えるかみさま・ほとけさまがこぞって県立歴史博物館へお目見えいたします。村むらで大切に伝えられてきた霊像と語らうひとときをどうかお楽しみ下さい。

(河村健史)



木造 阿弥陀如来坐像/県指定文化財(中手樺八幡神社蔵)

開催期間◎平成23年11月3日(祝・木)～12月4日(日)

場所◎福井県立歴史博物館 2F 特別展示室

観覧料◎通常の入館料でご覧になれます(一般100円、高校生以下・70歳以上の方は無料)

福井県復興宝くじ

[法 量] ①縦 50mm × 横 90mm
②縦 49mm × 横 107mm
[時 期] ①昭和24年(1949)、昭和21年

収益金を戦災や震災などの災害の復興に充てることを目的に、そのことを名称に記した宝くじを「復興宝くじ」といいます。大規模な災害を受けた地方自治体が、公共事業など公益の増進を目的とする事業を行う場合に発売することができるもので、賞金や経費などを差し引いた収益を事業の財源とします。最近では、今年の東日本大震災や平成16年(2004)の新潟県中越地震、平成7年の阪神淡路大震災の復興を目的に復興宝くじが発売されています。

今回紹介するのは、昭和23年(1948)6月に発生した福井大震災後の復興財源確保を目的に、福井県が発売した復興宝くじです。この宝くじは日本勧業銀行が発行を受託しています。表面には橋や道路、スコップやつるはし、測量用の棒や巻尺の絵がデザインされています。裏面には、「この宝くじは県下の震水害復興資金にあてるため発行します」と書かれており、震災とその後発生した水害の両被害からの復興資金確保が目的であることが明記されています。復興宝くじは、総額1億円分を4回に分けて発行し、1回あたり1350万円程度を純益とし、その額を復興財源に充てるとされ、具体的には、被害をうけた道路や橋梁の復旧費用にあてる計画でした。

1回目の発売期間は震災発生の翌年の24年3月20日から4月19日までの1か月間、1枚30円で、抽選日は

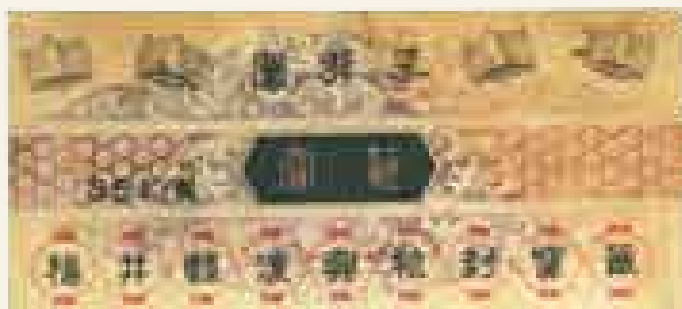
4月24日でした。賞金は特等50万円1本、前後賞が25万円、1等が10万円6本、2等1万円28本で、末等の5等は10円でした。また、賞金のほかに、自転車やシャツ、洗剤やちり紙などの賞品も付いていました。

この震災復興を目的とした第1回目の復興宝くじが発行された後、引き続いて、同年6月20日に2回目が、さらに、12月に3回目が発行されています。ちなみに、この2回はいずれも地元の福井銀行が受託銀行となりました。地方の銀行が単独で宝くじの発行を受託するのは異例のことでした。

ところで、福井県はこの震災復興宝くじ以前の昭和21年にも、戦災復興資金の確保を目的に、全国初の復興宝くじを発行しています。この宝くじは、福井の「福」と復興の「復」をあわせて、「ふくふくくじ」と呼ばれました。1枚10円で、200万通の発行が計画されました。1等1000円、2等500円、3等20円、4等5円の賞金のほか、自転車や靴下といった日常生活品の賞品も予定されていました。発行計画によると、収益金は県営住宅および福井市と敦賀市の戦災者・引揚者用の市営住宅の建設費用の一部とすることとなっていました。ちなみに、この宝くじは「被封印宝」とあるように、二つ折でキリトリ線に沿って切り取ると抽選番号が記載されている形式となっていました。そのため、完全な形で残っているのは極めて稀です。(山形裕之)



①昭和24年発行の復興宝くじ



②昭和21年発行の復興宝くじ

漆塗盆

[法 量] 縦 242mm×横 242mm×高 20mm

[製作時期] 昭和 18 年(1943) ごろか

[製作地] 鯖江市河和田

[表面] 軍用機図案。

胴体後部に「愛国 1591 (酒伊)」裏面:「越前塗」

この盆は、平成 22 年に当館に寄贈された漆器盆です。表面には軍用機が描かれ、裏面には「越前塗」と記されています。

まず、表面の図案から見てみます。軍用機の翼には日の丸、胴体尾部には「愛国 1591 (酒伊)」とあります。これは、日中戦争から太平洋戦争中に民間企業や個人による献金で製造され、陸軍に献納された軍用機(「献納機」)です。献納順に「愛国〇〇号(□□)」(〇〇は通番、□□は献納者名)と命名されました(海軍は「報国号」)。最初の献納機は昭和 7 年(1932)1 月の「あいこく 1 号」でした。その後、戦争の激化にともなってさかんに献納が行われ、昭和 20 年までに、愛国号、報国号ともに通番は数千に達したとされます。

ちなみに、福井県内からの最初の献納機は、昭和 7 年 4 月の「愛国 14 号(若越)」です。一般県民からの寄付による献納でした。献金は難航し、最終的には企業家による大口の寄付によって計 8 万円の予定額を満たすことになりました。献納は、その後も「丹生号」「小浜号」のようにより狭い地域で寄付金を募ってつづけられたほか、企業や資産家による献納も行われました。たとえば、献納記念絵はがき(献納の記念に陸軍省が製作)には、「山甚」と記された機体が写っているものもあります。ちなみに山甚は、江戸期から蚊帳の製造で知られる山甚産業株式会社の前身、「山甚商店」のことです。

今回の資料に戻りましょう。描かれている図案から、この盆の製作時期や製作意図がみえてきます。まず、「愛国 1591 (酒伊)」という文言から、この機体は酒伊繊維

工業株式会社(昭和 18 年に酒伊通信工業株式会社に改称。現、サカイオーベックス)によって献納されたものと分かります。サカイオーベックスにはこの機体の献納記念写真が残されています。大阪や東京の例では 1500~1600 番台は昭和 18 年の献納機につけられた番号であることから、この献納も同じく昭和 18 年でしょう。つまり、この資料は、軍用機の献納記念に酒伊繊維工業またはその関係者によって、昭和 18 年ごろに発注されたと考えられます。

さらに、実際の製作者についても資料に手がかりがあります。裏面の「越前塗」という印です。これは、鯖江市河和田で漆器類の製造・卸を行っていた小林氏が用いたものと分かりました。さらに、小林氏から漆器作りを請け負ってこの盆を実際に製作したのは、同じく河和田の高島吉郎氏です(情報提供:戦時資料研究家 萩谷茂行氏)。残念ながらご本人は他界されていますが、ご子息の政次郎氏によれば、この盆の絵型が残されていたそうです。しかし、当時の資料は火災によって大部分が焼失し、わずかに国内外の軍用機が掲載された新聞の切り抜きが残されるのみです。軍関係の製品の参考としてスクラップされたものかもしれません。ただ、同種の「越前塗」の印(本資料に用いられたものとは異なる)は現存しています。

本資料は、戦争遂行のために重工業以外の産業が「平和産業」として機械の供出や転業を余儀なくされた時期の製品として、たいへん貴重なものといえます。

(瓜生由起)



表面

「愛国 1591 (酒伊)」



「越前塗」

裏面

「風呂」

[法 量] 長径430mm×短径330mm×高300mm

博物館の役割の一つに資料の収集があります。ただやみくもに収集するわけではなく、収集する前に調査を行い、その結果から、収集する必要性を検討し、収集されます。こうして収集していく中に、時折、使い方が判然としないものもあります。

写真をご覧ください。木でできた桶に金属製の炉があり、ぱっと見た目には、風呂に見えると思います。この資料について、便宜上「風呂」と呼ぶことにします。

この風呂は、坂井市丸岡町笹和田という集落にある農家で使われていたものです。この風呂の他にも数点の資料を一括して寄贈を受けました。収集の際には調査をした訳ですが、使用した人は既に亡くなっており、親戚にあたる寄贈者の方にも分からないものとなっていました。こういったものについては、類似した資料などから用途を考えます。

まず、この風呂の大きさ、形状を見てみましょう。小判型をした桶に、炉と蓋が付いています。高さ約50cm、長径約43cm、短径約33cmとなっています。桶の内側の高さは約30cmであり、側面の板の厚さは約1.5cmとなっています。鉄製の炉が設置されており、炉の形は砲弾形のもを上下にくっつけたような形であり、最大径は約14cmとなっています。上部と底が開いており、底には火皿を置いていたようですが、火皿は失われています。横には穴は開いておらず、上部から炭を入れて使ったものと思われる。また、桶には蓋があり、閉じられるようになっています。たがは、針金をより合わせたものが5本付いています。

さて、大きさが想像できたと思います。それでは、用途について、どのような可能性があるかを考えます。

見た目の形は「風呂」ですが、大人が入浴するには小

さ過ぎます。子供が入るにしても、赤ちゃんが入るのが精いっぱい大きさです。しかも、炉が直接触れられるようになっていることから、やけどの危険があります。

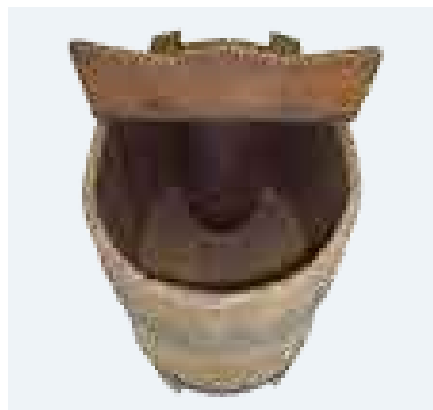
和紙製作の際に使われるテプロ(手風呂)などと呼ばれるものも形が似ています。冷たい紙料などに手をつける作業があるので、そういう時に手を温めるために使うものが手風呂でした。しかし、手風呂は、これよりも小さいものが多く、丸岡町笹和田は和紙製作を行っていないので、可能性は低そうです。また、陶磁器製作にも手を温めるために、同じようなものを使うこともあるのですが、やはり、大きさと立地の面から可能性は低そうです。他にも、東京都足立区ではセリの収穫作業の際、手を温めるためのものに使われた同じようなものがあります。しかし、これも立地の面から可能性が低そうです。

温めるということから、渋柿の渋抜き用ということも考えられます。渋を抜いて食べる方法にはいくつかあり、干し柿にする、酒・焼酎などに漬けるという方法のほか、加熱することでも渋を抜くことができます。38℃くらいのお湯にしばらく浸けておくと渋が抜けます。この桶にも十数個の柿が入りそうです。これは可能性がありそうです。

食品を保温するという可能性では、屋台などでの使用も考えられます。湯を張って、その中へ出汁を入れたとっくり等を入れて保温するという事も考えられます。

このように使用の目的は、いくつか考えられますが、今のところ、これだという決め手がありません。もし、この資料について、ご存知の方がいらっしゃいましたら、ぜひともお教えてください、よろしく願います。

(川波久志)



駅弁の掛紙

歴史資料としての有効性について

※ はじめに

駅弁の包装紙である掛紙は、印刷されている図案がバラエティーに富んでいることから、趣味としての収集品として集められることが多く、現在ではインターネット上に収集品を公開するサイトが幾つも存在します。

趣味としての掛紙収集の歴史が古いことは、残されている貼込帖の多くが、戦前にまで遡ることから知ることができますが、それらの貼込帖を見ると、コレクションとしての収集品のばあいと、旅の記念品の一つとしての収集の二通りの方法があったことがわかります。このような個人レベルでの収集のほか、最近では博物館の資料収集事業の一環として掛紙を収集し、展覧会などで公開されることもおこなわれるようになりました。

当館でも、以前から資料の一部として少数の掛紙が収蔵されていましたが、近年になり大幅に補強され、現在では5,000枚を超える明治～昭和に至る様々な掛紙のコレクションを収蔵するに至っています。

掛紙の用途は、単に駅弁の包紙に過ぎないのですが、

そこに描かれている図案や記されている標語は、その時々世相を反映することが多くあり、それらを分析することにより、歴史資料として十分に活用できる性格を有しています。本稿では、以下に若干の資料例を示し、掛紙の歴史資料としての有効性についてご紹介したいと思います。

※ ビジュアル化のはじまり

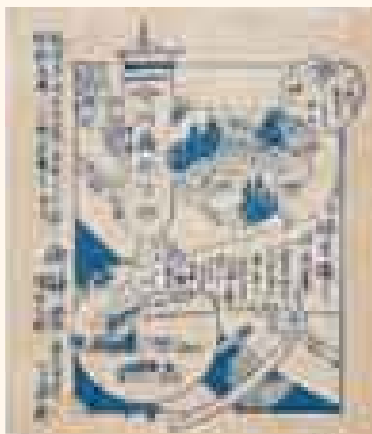
最初の駅弁が、いつ、どこで売られたのかは資料に恵まれていないことから、明治18年宇都宮駅、明治16年熊谷駅、明治10年神戸駅をはじめとする諸説があり定かではありません。そのため初期の駅弁を包んでいた掛紙がどのような様式であったのかも不明です。

資料1は、当館で所蔵する掛紙の中で最も古く遡ることができる、明治30年代前半の宇都宮駅の掛紙です。描かれた図案は単純な短冊であり、それに駅名、弁当名、他の販売品目を記したのみであることから、初期の掛紙が製造元の宣伝広告的な色彩が強いことがわかります。

掛紙の様式が大きく様変わりしたのは、明治36年(1906)に鉄道当局により出された「停車場構内物品販売



資料1



資料2



資料3

営業人従業心得」に「弁当、鮎、サンドウィッチ等ノ包紙ニハ左記事項ヲ鮮明ニ印刷スベシ」とし、「種類、等級、代価及び製造店名」「其駅付近ノ名所又ハ旅客案内トナルベキ事項」「本品ニ付不良又ハ不注意アリタルトキハ郵税先払ニテ申告希望ノ旨」と定められてからです。

資料2の掛紙は、明治39年頃に静岡駅で販売した三盛軒(現、東海軒)のもので、図案として、「今川義元古跡」「久能山」「安倍川鉄橋」を紹介したものであり、先に述べた明治36年の「停車場構内物品販売営業人従業心得」を踏襲したものであることがわかります。これ以後、図案がバラエティーに富むようになり、時には社会の様相を写し出すようになります。

❖ 旧外地・満州での使用例

駅弁は、戦前は日本本土のみではなく、樺太や朝鮮をはじめとする旧外地や、南満州鉄道などでも販売されていました。

資料3は、太平洋戦争終了時までには日本領であった樺太の豊原(現、ユジノ・サハリンスク)駅の掛紙です。図案は、南樺太の地図に鉄道路線図を配し、樺太の玄関口である大泊までは、北海道の稚内より連絡船で所要8時間であることを記しています。また、右上には名所として、樺太の総鎮守・総氏神であった樺太神社を紹介しています。

資料4は、満州の奉天駅の掛紙で、清の太宗・文皇帝と、その妃を祭っている北陵を図案としています。奉天は、満州の代表的な都市の一つとして、南満州鉄道の主要駅でもあり、特急「あじあ」号の停車駅でした。

資料5は、戦前には多数の日本企業が進出していた、安東市(現、丹東市)に所在する安東駅の掛紙です。図案には現在の中国と北朝鮮の国境に流れる鴨緑江に架け

られた可動橋を大きく描き、「朝鮮と支那の境の 鴨緑江 架けし鉄橋は 東洋一 十字に開けば 真帆片帆 行き交ふ 戒克の賑はしさ」と記しています。また、右上の囲みに描かれたのは、安東神社が所在した鎮江山公園です。

❖ 国策への利用

昭和12年(1937)に勃発した日中戦争がはじまり、それが長期化し戦争の時代に突入すると、国民の戦意高揚を図る方策の一つとして、掛紙も利用されます。

資料6は、金沢駅で大友楼が販売した弁当の掛紙であり、軍事輸送を担っていた蒸気機関車を図案とし、「全輸送力を戦争のために」とスローガンを掲げ、鉄道と軍事輸送の密接な関係を現わしています。

資料7は、昭和17年の米原駅の掛紙です。図案には、正面を見据えた威圧感のある兵士の顔を描き、大きく「沈黙!!一人一人が防諜戦士」という標語を記し、スパイへの注意を喚起しています。

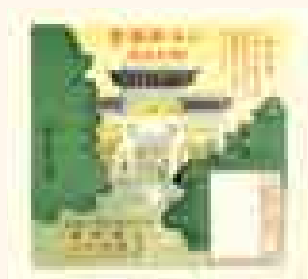
❖ 歴史資料としての有効性

幾つかの具体例を示しながら、掛紙が示す歴史資料としての有効性について紹介してきました。

掛紙は、言うまでもなく民間会社が製作する包紙としての性格しか有しませんが、鉄道事業のサービスの一端を担っていることから、その営業については厳しい制約を受けており、民間企業といえども国家の統制を受けやすく、デザインを含めて許可制となっていました。

このため、描かれた図案や標語から、その時代の世相や流行、国策などを読み取ることが可能なのです。

(水村伸行)



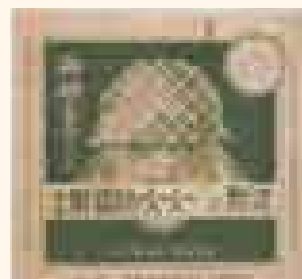
資料4



資料5



資料6



資料7

2月

- 18日(金)
福井県博物館協議会研修会
- 19日(土)～4月10日(日)
「一乗谷と北庄 発掘された戦国ドラマの舞台」
(オープン収蔵庫)

3月

- 5日(土)
常設展示一部更新・再オープン
(歴史ゾーン)
- 11日(金)
消防訓練
- 17日(木)
福井県立歴史博物館運営協議会
- 18日(金)
四日市市立博物館職員資料調査来館
- 26日(土)～5月8日(日)
福井県立若狭歴史民俗資料館移動企画展
「写された若狭 井田家所蔵古写真の世界」
(特別展示室)

4月

- 23日(土)～6月19日(日)
「昭和の学校 思い出の学校備品」
(オープン収蔵庫)
「木造校舎 明治・大正・昭和の学校」
(エントランスギャラリー)

5月

- 25日(水)～6月3日(金)
燻蒸休館
- 18日(水)
福井大学博物館課程学生の実習
- 24日(火)
北名古屋市歴史博物館館長・職員資料調査来館

6月

- 7日(火)
えちぜん鉄道映像撮影
- 14日(火)
福井鉄道映像撮影
- 15日(水)
福井大学地域文化課程見学来館

7月

- 1日(金)～8月31日(水)
特別展「鉄道博覧会 日本と福井の鉄道のあゆみ」
(特別展示室)
第2会場「鉄道模型の歴史」「鉄道切手の原画」
(オープン収蔵庫)
「懐かしの鉄道写真」
(エントランスギャラリー)
- 8日(金)
福井県立若狭歴史民俗資料館職員資料調査来館
- 17日(日)
福井鉄道 親子鉄道教室開催
(福井鉄道主催)
- 24日(日)
鉄道友の会会員による鉄道模型運転会
(オープン収蔵庫)

8月

- 5日(金)～10日(水)
博物館実習受け入れ(3名)
- 23日(火)
見学会「親子で楽しむ見学会 JR整備工場&
ますのすしミュージアム」
(バスツアー)

9月

- 30日(金)～12月13日(火)
発掘成果展「発見! 弥生・古墳時代の墓地
中角遺跡の発掘成果より」
(オープン収蔵庫)



鉄道模型運転会(鉄道友の会 福井支部)